

## 子育てを考える



「子どもとおもちゃと」

最終回

おもちゃを生かせる力

こんには、おもちゃコンサルタントマスターの柳生です。今回は、子どもの発達という視点からおもちゃを選ぶこととお話しさせていただきました。今回は、1つのおもちゃの遊び方を子どもの発達に合わせて発展させていくことについてお話しします。育ちの段階に沿ったおもちゃが別々のおもちゃでなくても大丈夫なのです。例えば、積み木やブロックがあると、どんな風に遊んでみますか？大人は、写真にあるような

立体的なものをいきなり作り始めますが、0～2歳では何かをイメージして組み立てることはまだできません。最初は1つの積み木を置いたり離したり、時には口に入れたりし



て五感を十分に使ってそのものを認識していくとする遊びや、大人が積んだものを崩す遊びを繰り返し楽しめます。1つの塊がばらばらになり、また1つの塊になることを何度も経験することで、それが同じものでできていることを認識し、自分から作ってみようとする意欲へとつながっていきます。また、形や色の概念も育ち始めますので、同じ形や同じ色のものを集めたり、並べたりして遊ぶ姿も見られます。この時期には、これらのことを子どもが飽きるまで十分に経験させてあげることが必要になります。そうしてようやく、ピースを横一列に並べ始め、だんだんと立体的な遊びへと発展したり、そこに人形などを加えることで、ごっこ遊びへと発展していきます。このように、積み木は点が線になり、面になり、やがて立体遊びへと変化していくのです。1つのお

もちゃにも、何段階かのストーリーがあるわけです。

しかし、これは子ども一人ではなかなか発展するものではありません。遊びのセンスに長けた年長者が周りにいることで、「おもしろそう」「やってみよう」という意欲が生まれ、遊びが広がっていくのです。このような「おもちゃを生かせる力」を育てるには、大人がどのようにおもちゃに向き合うかということが大切だと私は思います。それには、子どもに対して感度の高いアンテナが必要です。子どもと一緒に遊ぶと、このアンテナは受信度が高まり、このくらいの物がつまめるようになったなど、子どもの成長を遊びを通じて分かるようになります。だからこそ、できる範囲で一緒に遊んでほしいと思います。子どもにとって一番大切なことは、いろんな人と関わりを持つことです。おもちゃというのはあくまでもコミュニケーションツールです。子どもと子どもを、親と子どもを、そして、人と人をつなぐものであると考えます。

私のお話も最終回となりました。おもちゃを使って子どもの遊びを充実させ、より楽しい時と一緒に過ごしてください。

(やぎゅう かなこ)  
柳生 かな子

- 1995年 兵庫県立龍野高等学校普通科理数コース卒業
- 1999年 香川大学教育学部幼稚園教員養成課程心理学専攻修了
- 高松市立花園保育所勤務
- 2005年 高松市立古高松保育所勤務
- 2007年 おもちゃコンサルタントマスター資格修得
- 2010年 高松市立桜町保育所勤務